

北区戦後80年誌発刊にあたって

東京都北区長 やまだ 加奈子



終戦後、80年が経ちました。私たちの暮らしは豊かになり、北区は活気に満ちた街に発展、成長しました。しかし、時が経つにつれ、戦争を体験した世代の方々は「高齢となり、地域に残る戦争の記憶は薄れていきつつあります。」

北区では、戦争の記憶を語りつき、平和の尊さを改めて考えてほしいと思い、次の世代を担う子どもたちに向けて、「北区戦後80年誌 まんがと写真でたどる 戦争と暮らし」を発刊しました。この本には、これまで区に寄せられた戦争の体験談や当時の資料、区が行った調査をもとに、戦中・戦後の北区では何が起きていたのか、まんがや写真を使用してわかりやすく説明しています。区民の皆様には、この本を通して、平和について考え、語り合い、これからの平和な未来につなげてほしいと願っています。

今年は、世界の恒久平和と永遠の繁栄を願い、北区が「平和都市宣言」を行ってから、40年の節目の年でもあります。この宣言に基づき、今後とも区民の皆様とともに、「誰かひとりではなく、みんなが豊かさを感じる」ことができる、あたたかな北区」の実現に向けて努力してまいります。

終わりに、本誌の作成に携わってくださった皆様、写真や資料等の提供にご協力をいただきました方々に心から感謝申し上げます。発刊にあたっての言葉といたします。

令和8（2026）年3月

目次

第1章 変わりゆく暮らし

- ・まんがでたどる北区と戦争 第1話
- ・解説 戦時体制から開戦へ／物資不足と配給制／銃後の守り／女性たちの戦い／戦時の学校生活／出征／勤労動員
- ・用語集①

第2章 迫りくる戦火

- ・まんがでたどる北区と戦争 第2話
- ・解説 空襲へのそなえ／コラム 戦争に利用された紙しばい／防空壕／コラム 飛鳥山の防空壕／空襲の被害／北区の戦災焼失区域／空襲の爪あと／子どもたちの苦難／疎開先での生活
- ・用語集②

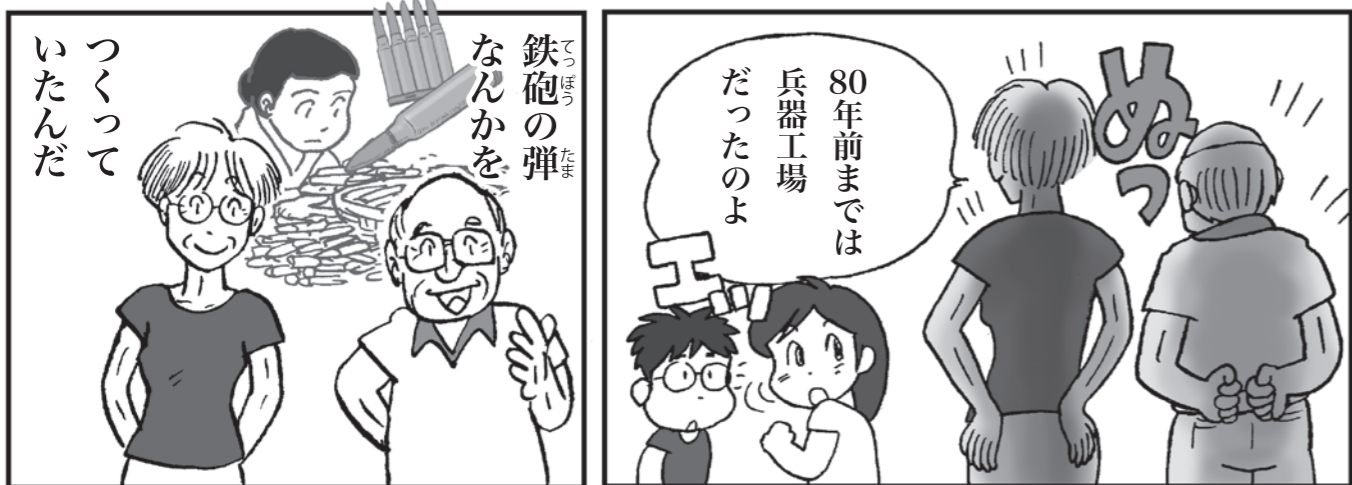
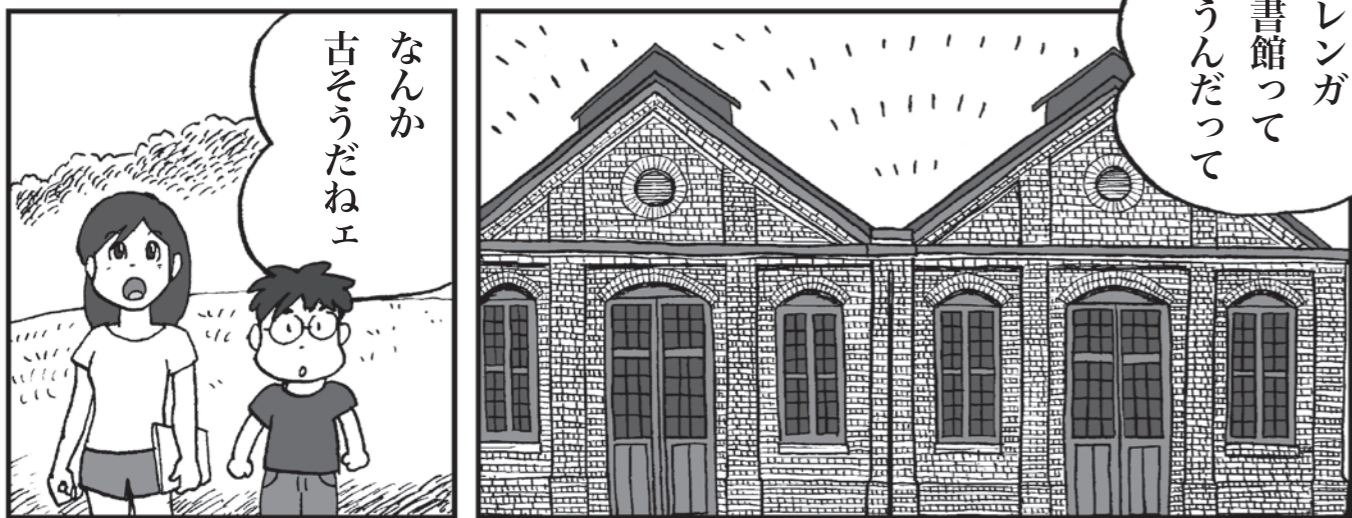
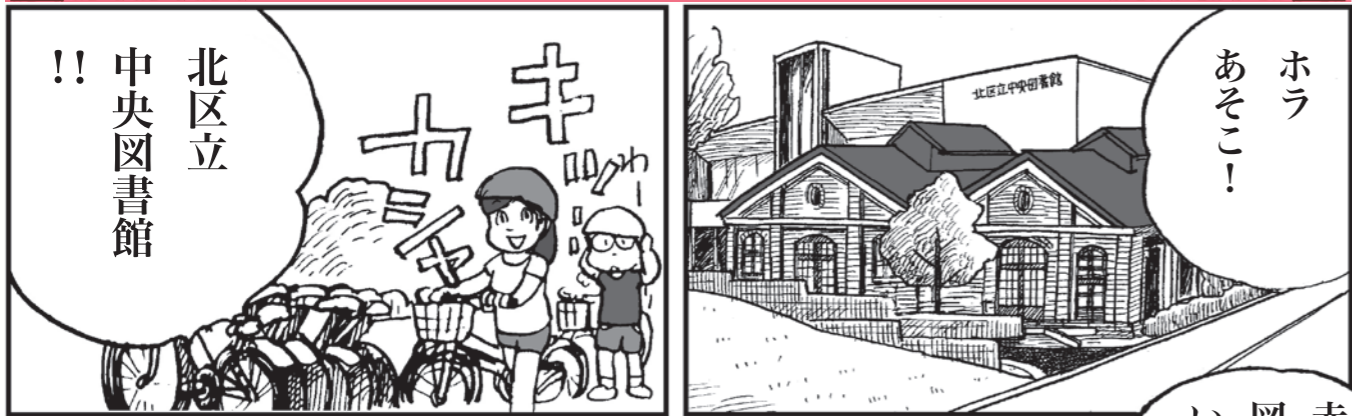
第3章 焼け跡からの出発

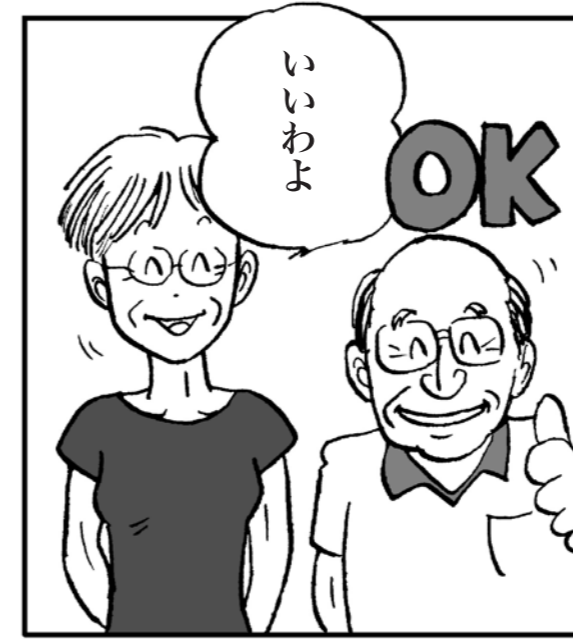
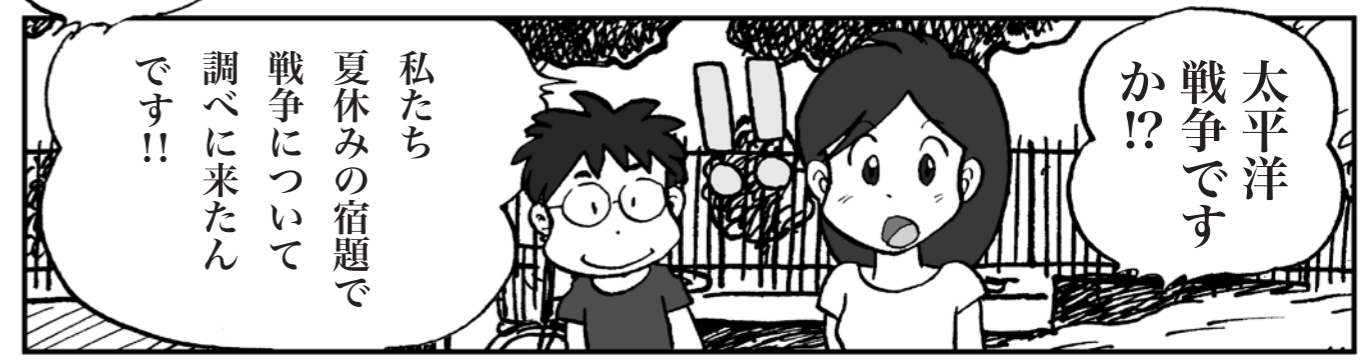
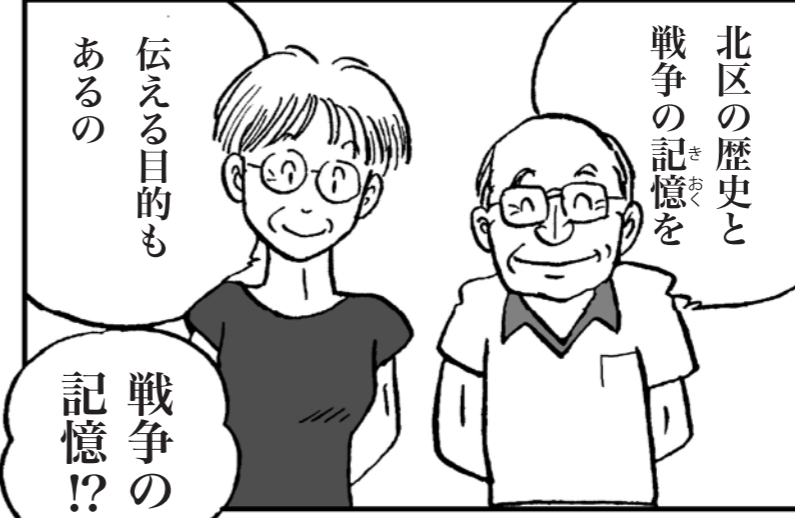
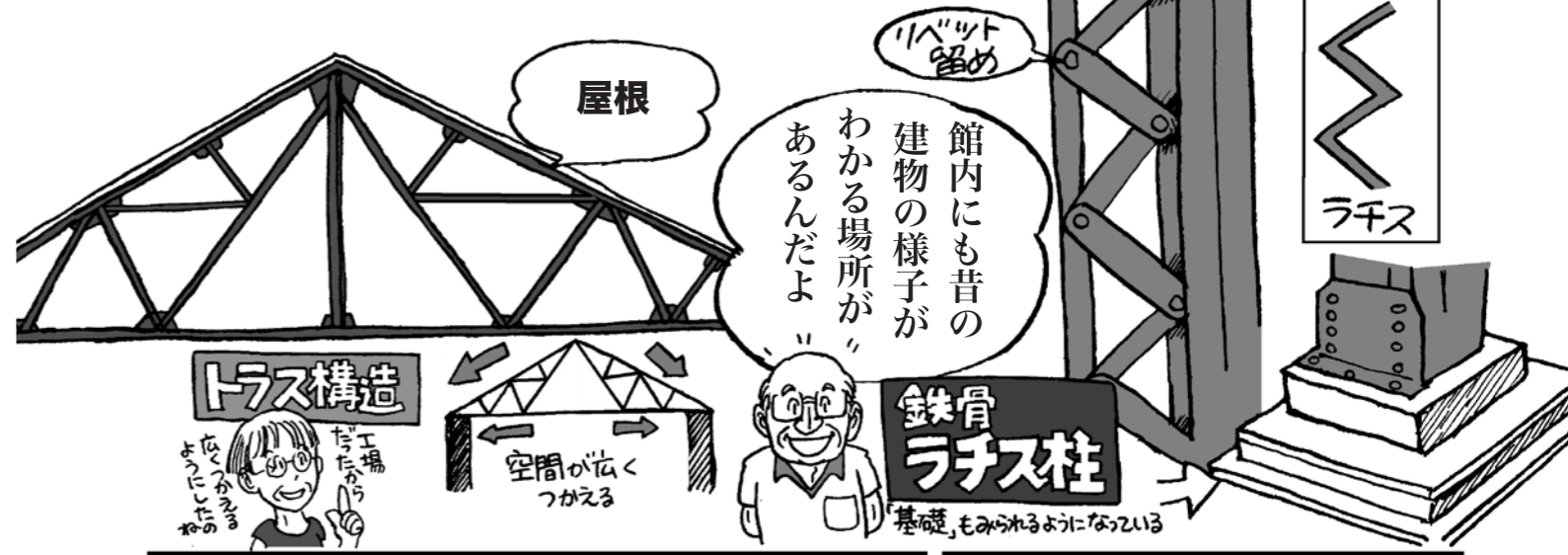
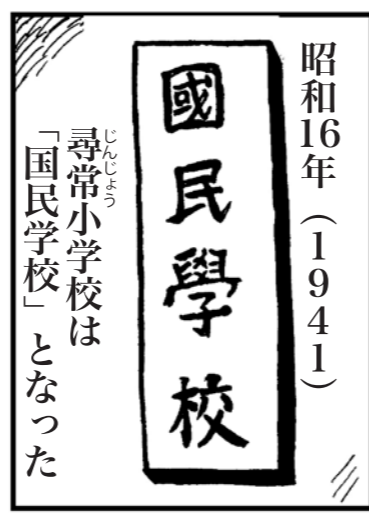
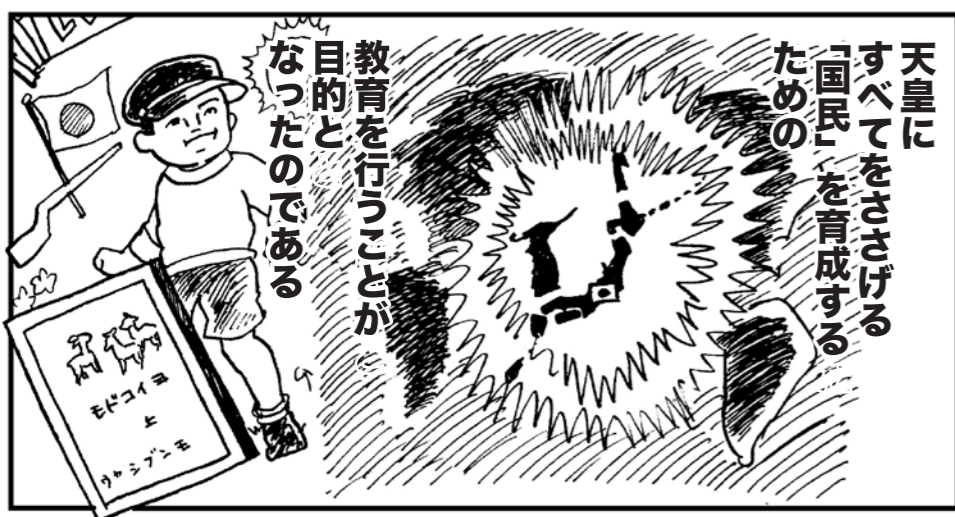
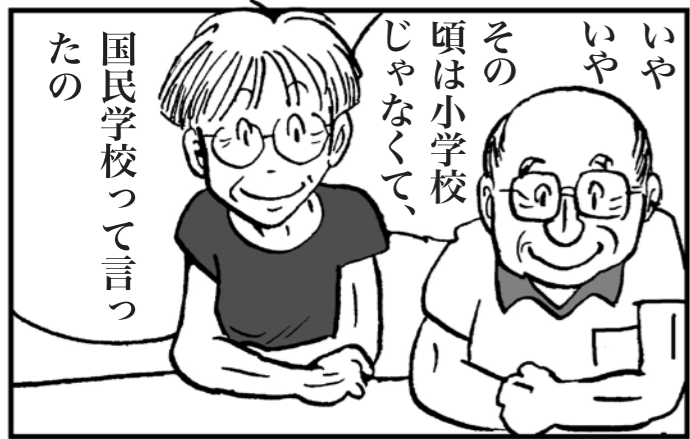
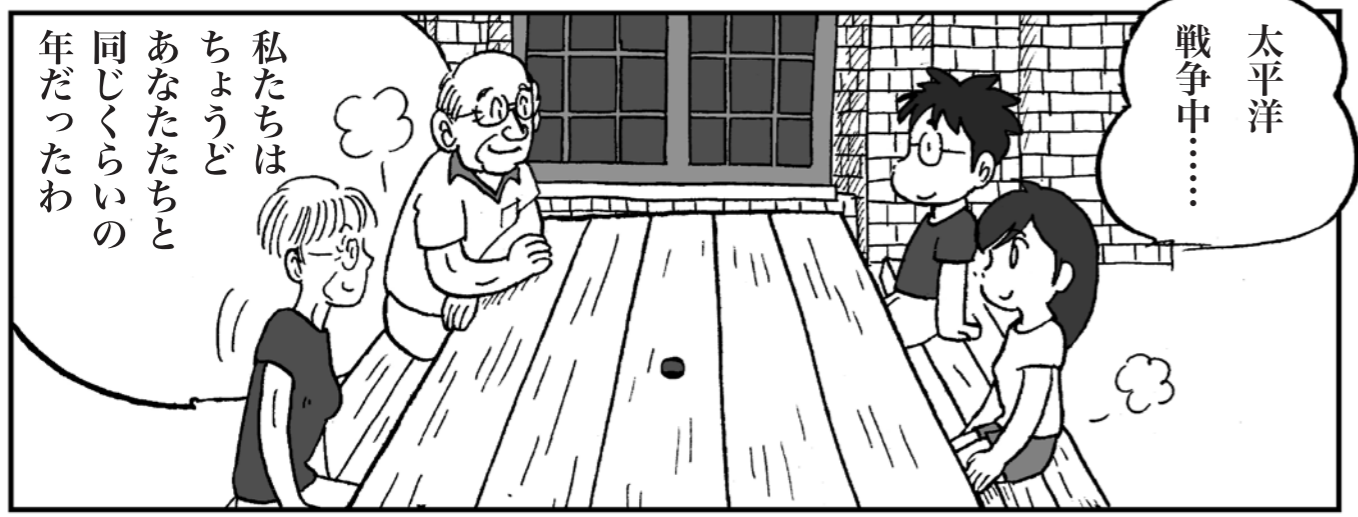
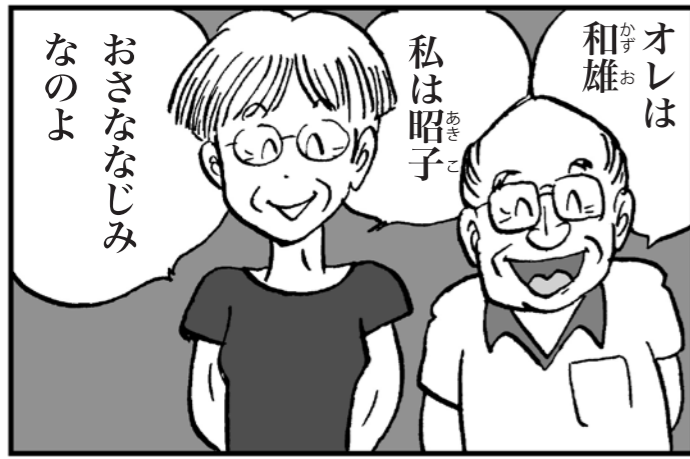
- ・まんがでたどる北区と戦争 第3話
- ・解説 戦後の苦しい生活／学校の再開／引き揚げ者の苦勞／軍用地の解放と返還／北区の成立と平和都市宣言
- ・用語集③
- ・まんがでたどる北区と戦争 エピローグ
- 北区戦争関連年表
- コラム 北区にあった軍の施設
- 北区ゆかりの人々と平和への思い
- 行ってみよう！北区について学べる施設
- 読んでみよう！戦後60年誌・70年誌

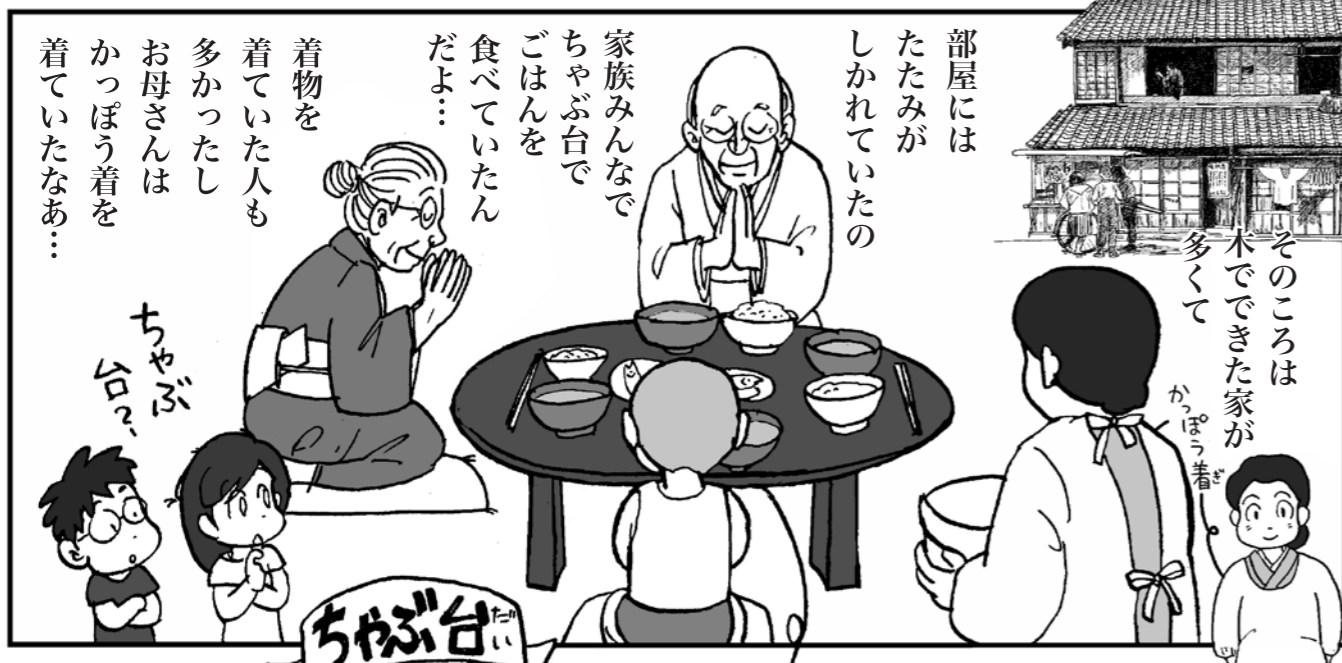
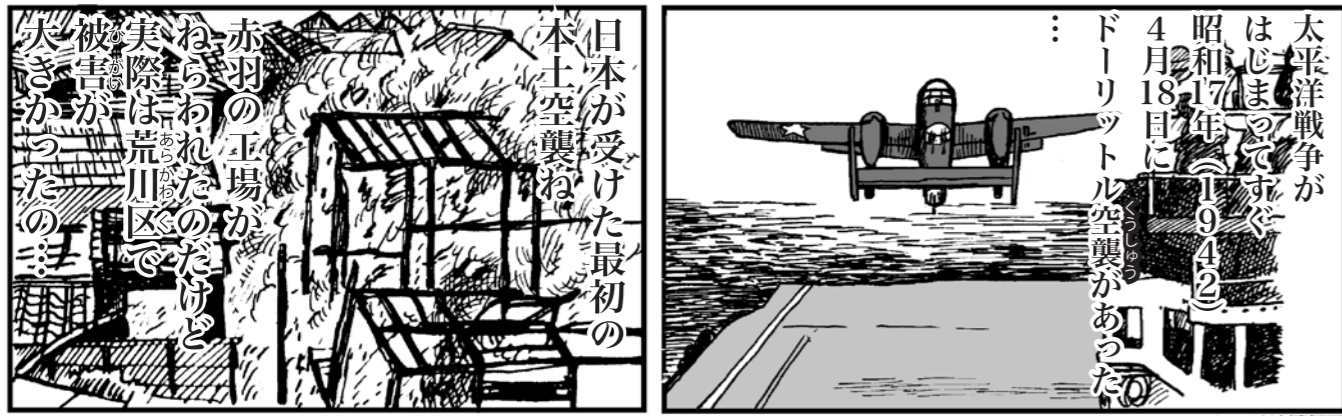
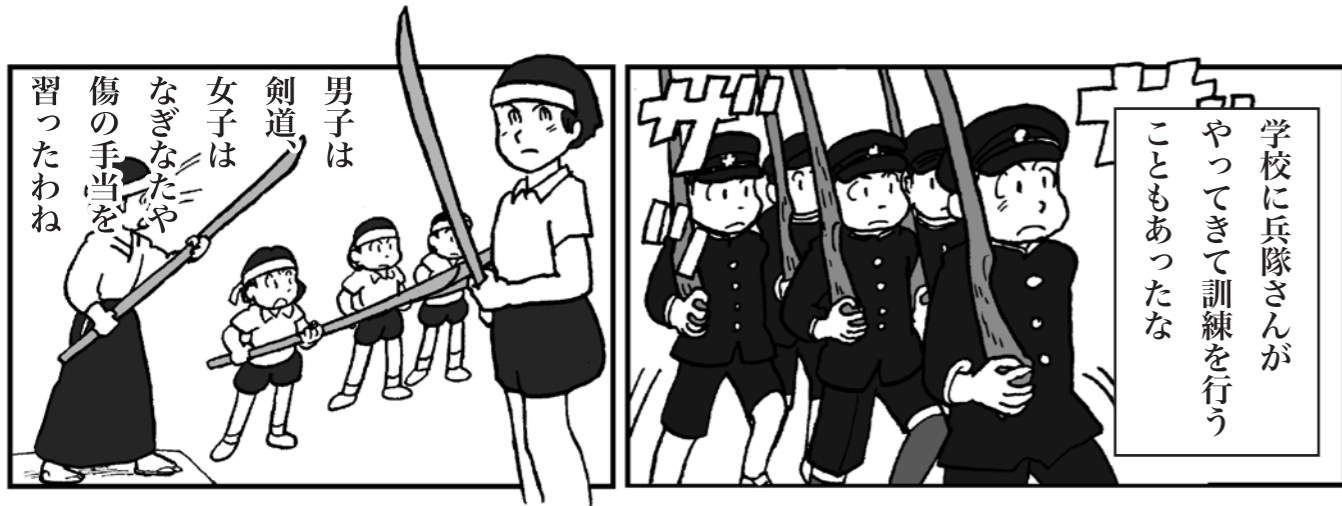


第1章 変わりゆく暮らし

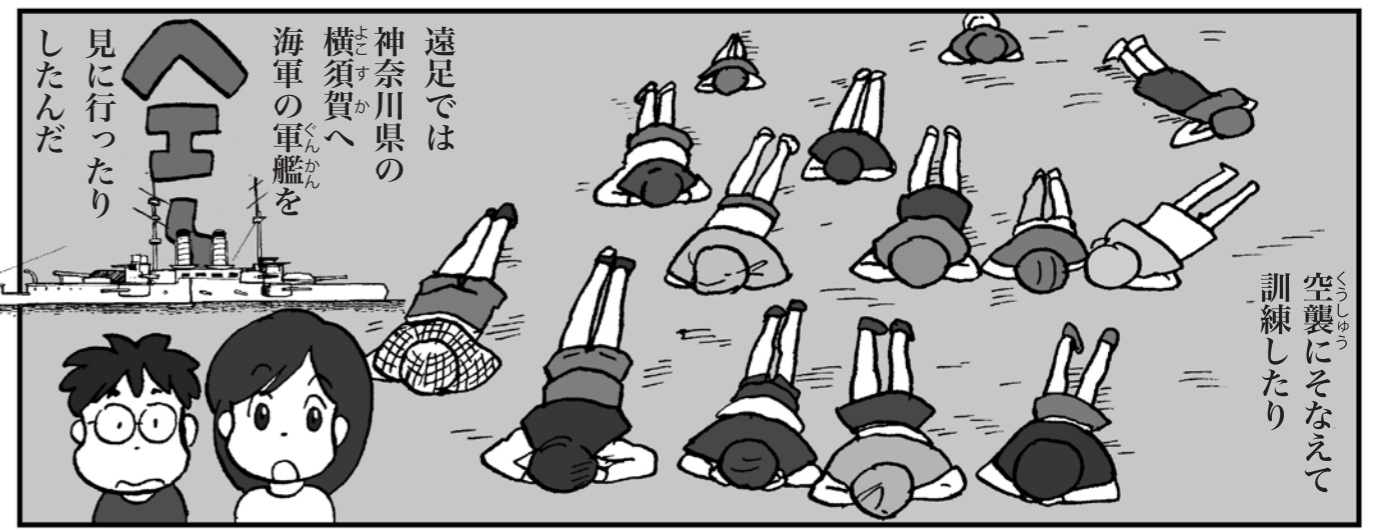
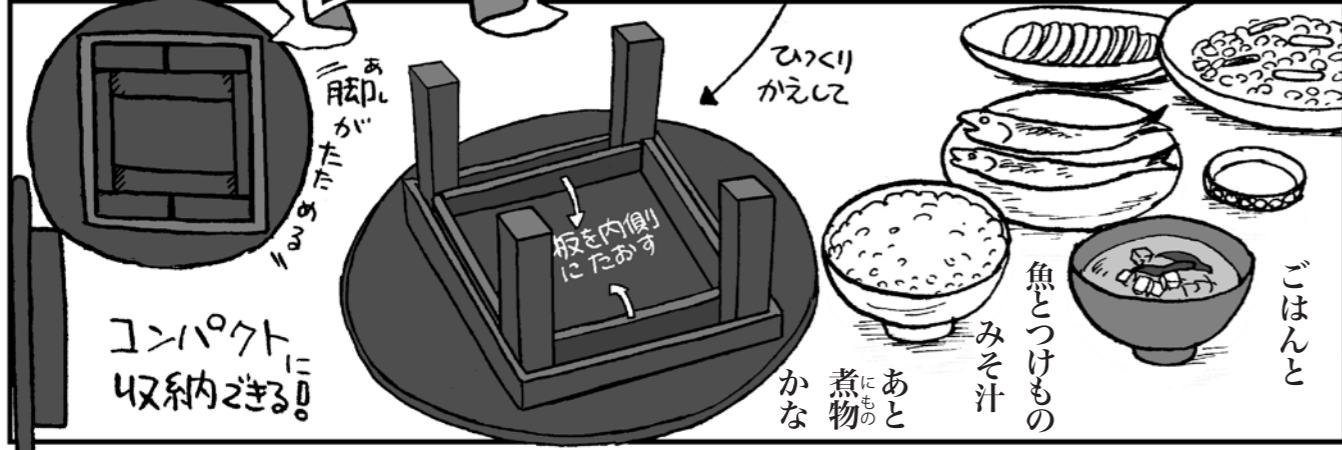
まんがでたどる北区と戦争 第1話



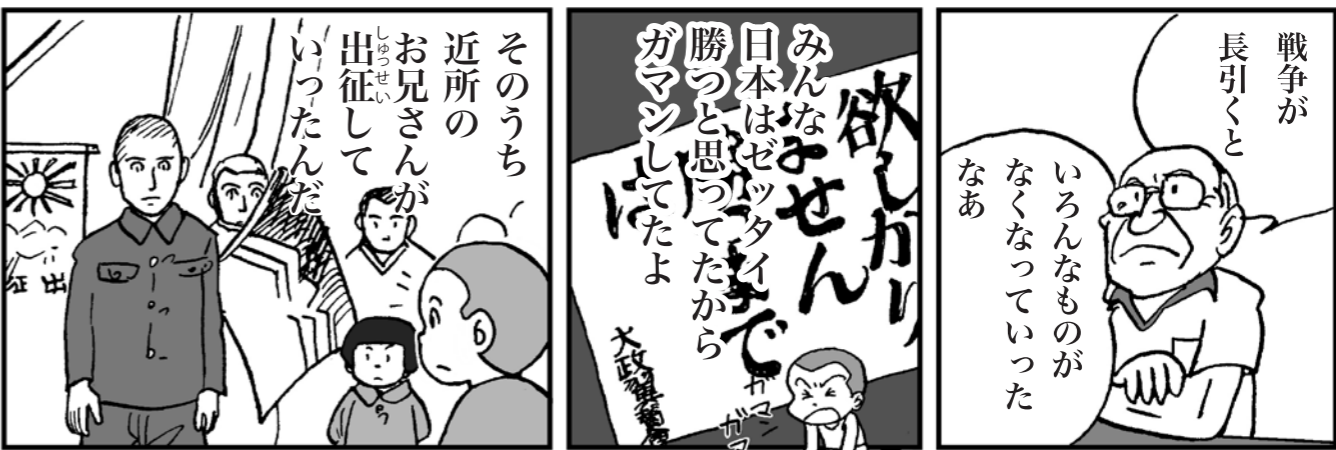
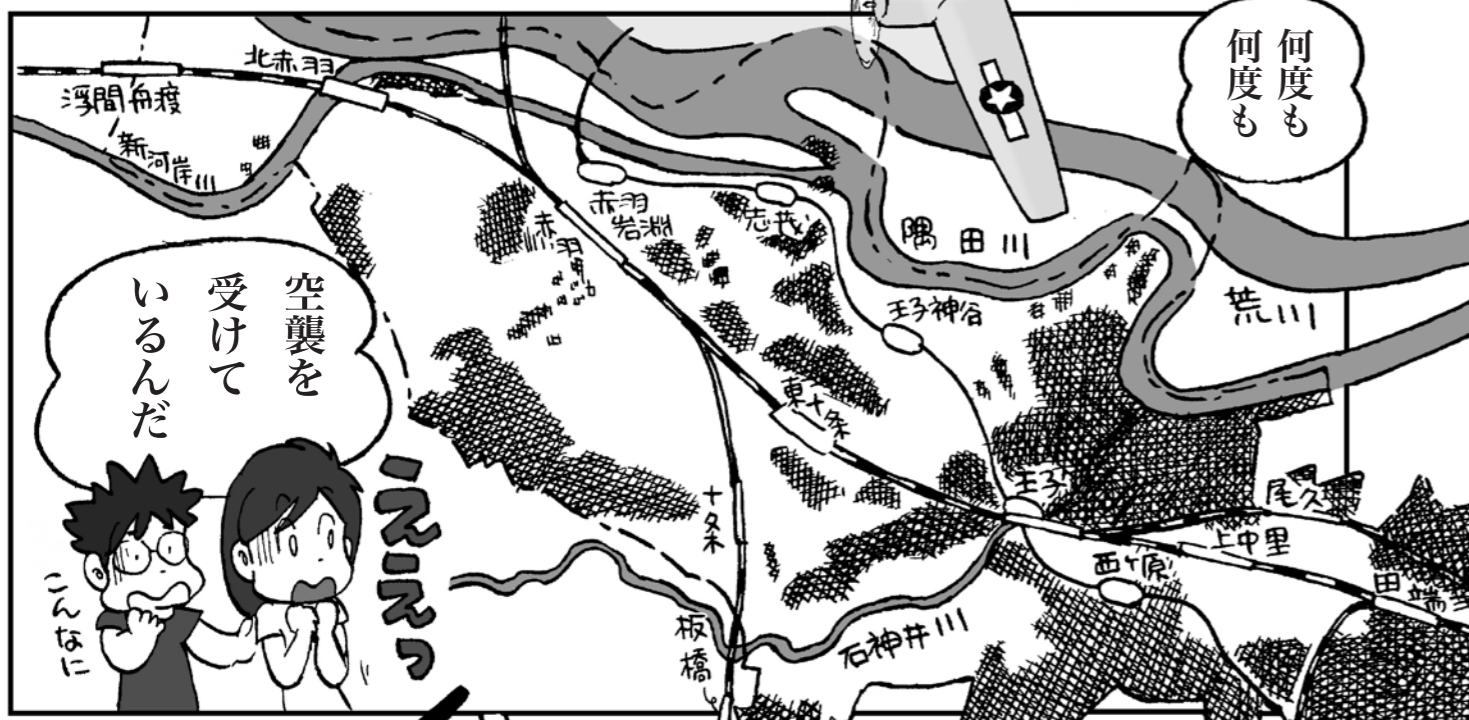
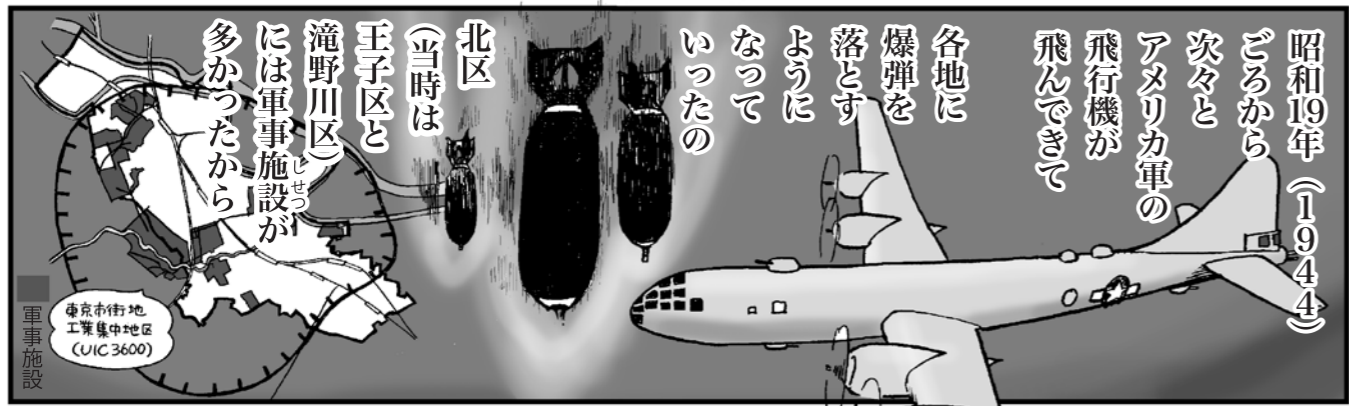
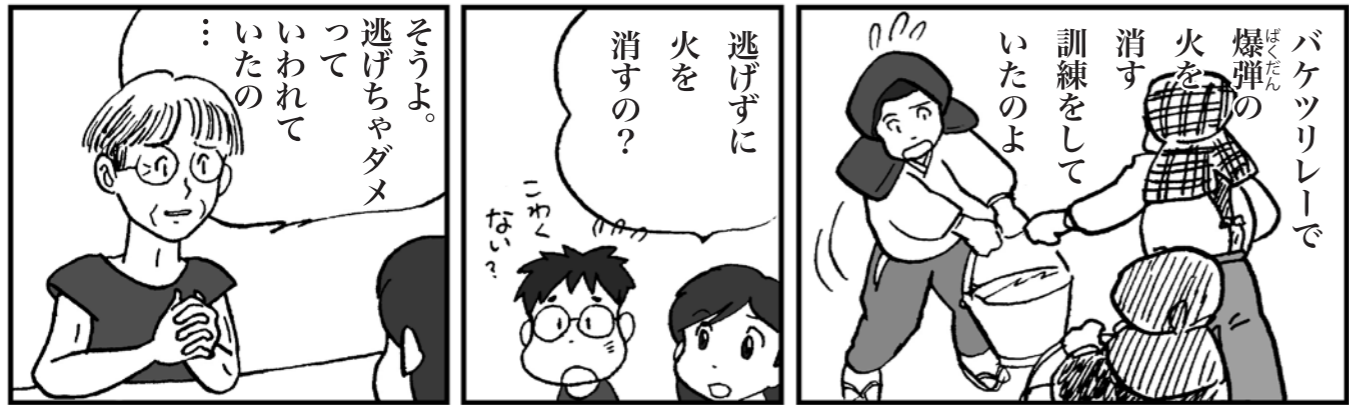




▲板橋街通沿いの長屋を参考に作画



横浜市歴史博物館 Youtube『動画を見て調べよう! 昔のくらし道具紹介「ちやぶぶ台」を参考に作画



防火担任者によるバケツリレー (高田滋子氏提供) 写真をもとに作画



戦時体制から開戦へ

明治時代から大正時代の日本は日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦と、ほかの国々と戦争を重ねて領土を拡大してきました。やがて昭和6年（1931）に中国東北部で満州事変が起ると日本と中国の対立がますます深まり、昭和12年（1937）には日中戦争が始まりました。人びとの暮らしも戦争を優先した形（戦時体制）に急速に切りかわっていききました。

昭和15年（1940）、すべての国民が戦争に協力する体制を整えるため、政府は全国に10世帯前後を1組とした隣組を結成させました。隣組は定期的に話し合いの場（常会）を設けることや、政府からの通知を回覧板で伝えることが義務づけられました。そのほか、貯蓄の推進、防空訓練、金属などの回収、軍隊に入る兵士の見送りなど、隣組はさまざまな活動を団結して行いました。その一方で、戦争が長引くにつれ、国の方針に反対していないか、スパイ活動をしていないかなど、おたがいに監視するようになりました。

そして、昭和16年（1941）12月8日、日本軍がハワイの真珠湾に攻撃をかけ、ついに太平洋戦争が開戦しました。日本などの枢軸国とアメリカ合衆国・イギリスなどの連合国との間で始まった戦争は、人びとの暮らしと生き方を大きく変えていきました。



物資不足と配給制

日中戦争が始まると他国からの輸出入が制限されてしまい、さまざまな物資が不足するようになりました。そこで、軍隊で使うもの（軍事物資）の材料を優先して確保するため、政府が物資の配分を決めるようになりました。また、物価も高くなつたので、物資の値段も政府が「公定価格」として決めました。

やがて戦争が長引くにつれて、食料品などの生活必需品もひどく不足するようになったことから、物資を公平に配分するため大都市には配給制が導入されました。昭和15年（1940）の砂糖、マッチに始まり、米・酒・木炭・塩・みそ・しょう油、魚類、青果、衣料品などが次々と配給制の対象となりました。

配給通帳・切符は家ごとに配布され、品目ごとに買える数量が決まっていました。たとえば、米の場合は年令・性別ごとに一人一日当たりの割当量が示され、その家の人数分だけ買うことができました。衣料品は決められた点数分の切符を「衣料切符」から切り取って買う時に提出します。

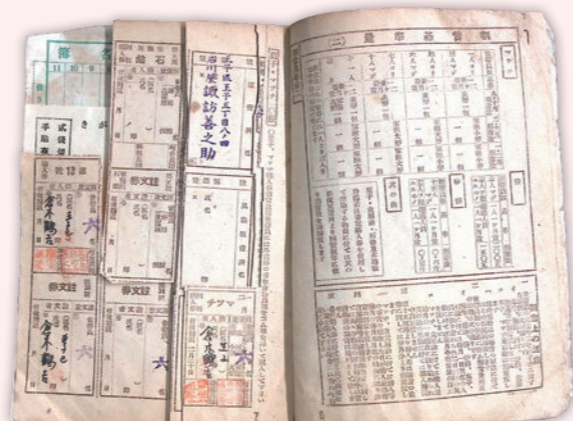
実際には物資そのものが不足しているため、配給の割当だけでは人々の生活は成り立たず、知人に譲ってもらったり、遠方へ買い出しに行ったりと、さまざまな方法で物資を手寄せざるをえませんでした。



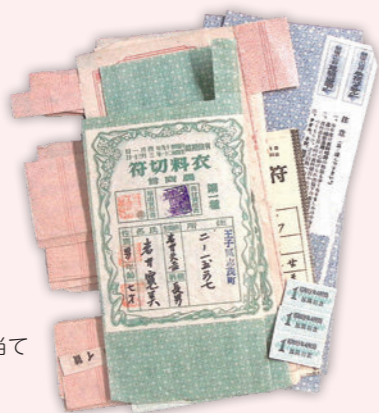
隣組購入台帳
昭和19年（1944）
物資不足が進むと隣組を通して食料が配給されるようになった。



家庭用品購入通帳（表紙）（見開き）
昭和18年（1943）
砂糖・マッチ・酒・みそ・しょう油・石けんなどの購入券が一冊にまとめられている。



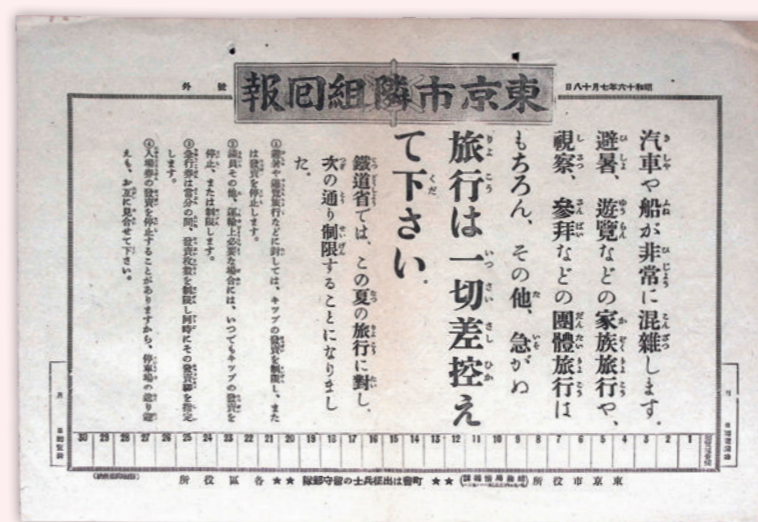
パン類購入券
昭和18年（1943）
裏面に「パン類八毎月一回 菓子パン三個デス」と記されている。



衣料切符
昭和19年（1944）
戦争が長引くにつれて割り当てられる点数も減っていった。



隣組台帳
昭和18年（1943）
隣組の防空設備や配給量の一覧、各世帯のくわしい情報などを記入する。



東京市隣組回報
昭和16年（1941）
太平洋戦争の開戦前だが、すでに旅行は制限されている。



隣組パズル
昭和10年代
隣組の役割がパズルで学べるようになっていく。



隣組防空群長 腕章
昭和10年代
隣組の防空群長が訓練のときなどに使用した。



銃後の守り

昭和13年（1938）、政府は国民の労働力やあらゆる物資・資源を戦争のために使えるようにしました（国家総動員法）。実際に戦争が始まると、主な働き手だった男性たちが兵士として次々と戦地へ送られてしまったため、男性たちが戻ってくるまでは残った人たちが日常の生活を守っていかねばなりません。そのため、戦争に行かない女性や中高年の人たちは、戦地で戦う兵士を後ろから支える気持ちで働くことを求められました（銃後の守り）。たとえば、家庭にある金属製品の供出に協力する、食料不足をおぎなうため共同で菜園を作る、防空訓練をおこなうなど、やるべき仕事は数多くありました。

また、戦争にはばく大な費用がかかるため、「ぜいたくは敵だ！」の標語のもと、人々は節約と貯蓄に励むように指導されました。たびたび国庫債券（国債）も発行され、人々は節約して貯めたお金で国債を買い求めました。隣組に配布された本にも「日本中でそれぞれ百円の国債を買えば、飛行機なら12000機できる」と具体的に書かれていて、「銃後の協力は国債を買うことだ。」と標語も示されています。しかし、戦争が終わると国債の価値は失われて、紙くず同然になってしまいました。



女性たちの戦い

男性たちが戦地へと送り出されていくなか、「産めよふやせよ」の標語のもと、女性は早く結婚をして一人でも多くの健康な子どもを産むように期待されました。そして、結婚した女性たちは良い妻・賢い母（良妻賢母）であることを求められました。また、家庭を持った女性たちは愛国婦人会や大日本国防婦人会といった女性団体に参加して、戦争でなくなった方やケガをした方の家を訪ねたり（慰問）、戦地へ慰問袋をおくったり、防空訓練を行うなど、さまざまな活動を積極的に行っていました。太平洋戦争が始まると、女性団体は大日本婦人会にまとめられ、成人女性はすべて「銃後の守り」に努めるように仕向けられていきました。

さらに、男性が次々と戦地へ送られるため、女性たちには人手不足をおぎなう役目も加わりました。太平洋戦争が長引くなか、12才から40才までの未婚女性は強制的に戦争で使うものを作る工場などで働くことが義務づけられ、北区内にあった軍の工場でも女子学生など女性たちがたくさん働いていました。ほかにも、隣組の仕事や訓練をこなし、配給の列にならんで食料や物資を確保するなど、戦地に行かない女性たちも、父や夫のいない家を守るために必死で戦っていたのです。



愛国婦人会の女性たち（絵葉書）
昭和17年（1942）以前
王子の愛国婦人会の女性たちが慰問袋を作成したときの記念写真。慰問袋には石けんなどの日用品や食料品、薬などを詰めた。

大日本国防婦人会の女性たち
昭和17年（1942）以前
王子の「名主の滝」での記念写真。同会の会員は白いカッポウ着にタスキを必ず身につけた。



婦人会タスキ
昭和17年（1942）以前
愛国婦人会王子区分会と大日本国防婦人会のタスキ。



慰問袋
昭和初めか
「武運長久」の文字と日の丸の旗などの絵が描かれた手ぬぐいで作られている。



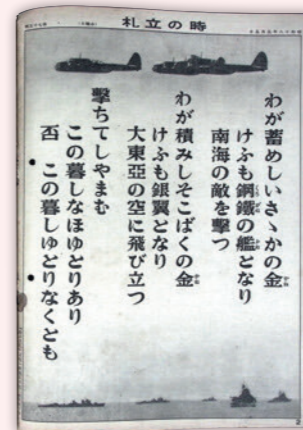
東京市隣組回報（ウラ面）
昭和16年（1941）
金属の回収を伝える文には、鉄・銅・銅の合金が回収の対象と記されている。



マッチすり（代用品）
昭和10年代
マッチに火をつけるためのリンも不足したため、陶器で代用品が作られた。



大東亜戦争割引国庫債券
昭和18年（1943）
額面50円だが、割引で発行価格30円となっている。戦時中は払い戻しを求めることが難しかった。



貯蓄をすすめる広告
昭和18年（1943）「写真週報」
戦争に勝つため国民の財産を国債や貯蓄に使うようにすすめている。



戦時の学校生活

戦時体制のもとでは、子どもたちも年少の国民として戦争に協力することが求められ、「少国民」とよばれました。昭和16年（1941）には、それまでの尋常小学校（6年）と高等小学校（2年）をあわせて「国民学校」に改められ、国のために戦える人を育てる教育が行われるようになりました。

国民学校で学ぶ科目は国民科（修身・国語・国史・地理）、理科（算数・理科）、体操科（武道・体操）、芸能科（音楽・習字・図画・工作・裁縫）の4教科で、なかでも国民科の修身や国史は、愛国心や天皇への忠誠心を高める内容になりました。体操科も重視され、身体をきたえるだけでなく、軍事訓練のような練習も行いました。その他の科目でも、たとえば音楽では教科書から外国の曲がなくなつて「おもちゃの戦車」「戦友」「特別攻撃隊」などの新たな曲に変わるなど、すべての科目が戦争に関係する内容になりました。

授業以外でも、子どもたちは「日参団」を組んで、毎日登校する前に地元の神社で戦勝を祈願する活動を行いました。友だち同士の遊びも、兵隊ごっこや陣取りなど、軍隊や戦争に関するものとなり、子どもたちの生活は戦争一色に染められていきました。

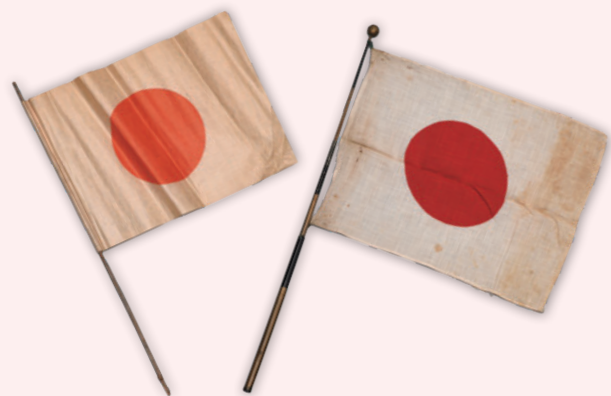


出征

少国民と呼ばれた子どもたちも、徴兵制度により、17才になると男性は国民軍の一員となりました。20才で徴兵検査をうけ、甲種（五段階評価で最良）合格者から抽選を行い、選ばれた人が2年または3年間、軍隊に入りました。軍隊に入ること陸軍の場合は入営・海軍の場合は入団といい、実際に戦地へ行くことを出征といえます。

戦争中は、兵士となることは日本の国のために働く名誉なことだと教えられていたので、入営や出征が決まると、親せきや近所の人が旗やのぼりをおくつて祝いました。また、戦地から無事に帰ってくることを願って「千人針」を持たせることもありました。千人針は、布に赤い糸で女性がひと針ずつ結び目をぬいつけたものです。千人針は弾除けになるといわれ、兵士は腹巻きにするなどして身につけました。

戦争が激しくなると兵士の数が足りなくなり、昭和18年（1943）に、大学生や専門学校生も軍隊に入ることが決まりました。徴兵検査の年齢も19才になり、軍隊に入る年齢が45才までに広げ、兵士不足を補おうとしました。徴兵検査の結果が甲種合格者以外の人や、一度入隊したことがある人も再び軍隊に入るようになりました。このときの召集令状は、赤くめられた紙を使用したので「赤紙」と呼ばれました。



日の丸小旗
昭和10年代
兵士を見送る時には、みんなで日の丸の小旗をふった。



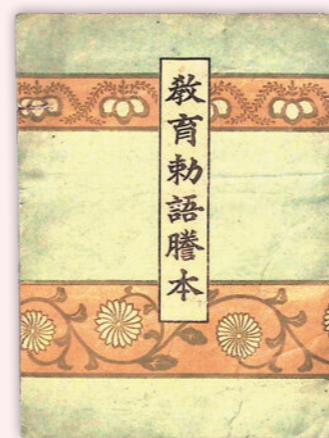
出征兵士の見送り
昭和16年（1941）くろつぶ理容室（三浦調髪所）提供
滝野川での見送り。戦争が始まったころは日の丸を手にした多くの人が集まったが、昭和19年になると家族だけでひっそりと見送るようになった。



千人針
昭和10年代
「虎は千里を行き千里を帰る」という言い伝えから虎を描いたり、鉄砲の弾にあたらぬまじない言葉を書くこともあった。



軍隊手帳
昭和20年（1945）以前
星のマークは陸軍で使用した。入営する兵士は「奉公袋」に軍隊手帳や召集令状、貯金通帳などを入れ、身につけた。



教育勸語とう本
昭和18年（1943）以前
教育勸語の内容を写したもので、北区の豊川小学校で使用した。



雑誌『写真週報』
昭和13年（1938）
当時の内閣情報部が発行した雑誌の表紙には「愛国行進曲」を合唱する子どもたちの写真が使われている。



教科書『ヨミカタ』
昭和16年（1941）
国民学校初等科一年生が使う国語の教科書でも兵隊の行進が題材となっている。



児童向けレコード
昭和10年代
戦前の小学生は必ず歌えた「君が代」「一月一日」と「紀元節」「金剛石」が収められている。



勤労働員

多くの男性が兵士として軍隊に入ると、その分、国内で労働力が不足するようになりました。そこで、12才以上の生徒や学生たちが、学校ごとに割り当てられた工場や、働き手が兵士となった農家の手伝いをしました（学徒勤労働員）。生まれて初めて農業をした学生も多くいました。防空壕（28ページ参考）をほったり、建物疎開（38ページ参考）のために建物をこわす作業などもしました。はじめは数日だった勤労働員が、昭和19年（1944）には一年中の作業となりました。

会社や商店などに勤めていない女性のうち、結婚していない16才以上の女性は軍の工場で働くことになりました。工場で働くことを自分から申し出る女性もいれば、工場で働くのがいやで、急いで別の会社に就職したり結婚する人もいました。

女性たちは、赤羽台にあった陸軍の被服本廠の工場では軍服をぬったり仕分けする作業をし、十条台にあった第一陸軍造兵廠の工場では、製造された弾を箱につめたり、風船爆弾の気球を作る作業をしていました。風船爆弾は、のりで和紙を何層にもはって作った直径10メートルほどの気球に爆弾をつけて、アメリカへ飛ばした兵器です。終戦後、自分が作業に参加していた風船爆弾によって実際にアメリカで死者が出た事を知り、ショックを受けた女性もいました。



軍工場働く女性を紹介する雑誌記事
昭和15年（1940）
東京第一陸軍造兵廠で弾を箱につめる女性。



東京第一陸軍造兵廠
紅葉門の標識（右）
と門標（左）
昭和15年（1940）ころ
星に丸のマークは昭和15
年制定の東京第一陸軍造
兵廠の標識。



陸軍被服本廠
裁縫工場（絵葉書）
大正期か
大勢が分業してミシン
や手ぬいで軍服をぬい
上げていく。



第一陸軍造兵廠ができたころの様子（絵葉書）
明治39年（1906）（スタンプ日付）
広い敷地にれんが造の工場が並んでいた。はじめは東京砲兵工廠
銃砲製造所と呼んだ。

01

日中戦争

昭和6年（1931）、日本は中国の東北部の満州を占領して満州国を建てますが（満州事変）、これに抵抗する中華民国国民政府と日本軍は激しい争いをくり返すようになりました。やがて昭和12年（1937）7月7日、中国北部で起きた争いをきっかけに日中戦争が始まりました。中国各地で戦いが続き、昭和16年（1941）に中国を支援していたアメリカと太平洋戦争になりました。太平洋戦争の終わりとともに日中戦争も終わったといえます。

02

太平洋戦争

太平洋戦争は昭和16年（1941）から20年（1945）まで、日本・ドイツ・イタリアなどの枢軸国とアメリカ・イギリス・中国などの連合国との間で行われた戦争のことです。第二次世界大戦の一部でもあります。昭和16年12月8日、日本軍のマレー方面への攻撃（マレー作戦）とハワイの真珠湾攻撃によって戦争が始まり、はじめの半年は日本が東南アジア方面をつぎつぎと攻略しました。しかし、翌17年6月にはミッドウェー海戦で日本海軍がアメリカ海軍に大敗し、その後もガダルカナル島・アッツ島での激戦に敗れました。昭和19年（1944）になると、日本本土への空襲がだんだんと増え、昭和20年3月には東京大空襲、8月には広島・長崎に原爆が投下されて、非常に多くの命が失われました。同年8月15日、玉音放送で戦争の終わりが伝えられ、9月2日に日本が連合国に降伏する文書を受け入れて、ようやく戦争が終わりました。

03

徴兵・徴用

国家が国民を兵士として集める制度を徴兵制といいますが、明治6年（1873）の徴兵令によって、17才から40才までの男性全員が国民軍名簿に登録され、男性は20才になると徴兵検査を受け、合格者の中から軍隊に入る人が選ばれました。はじめは、家の跡継ぎとなる長男や大学生などは兵士となることを免除されていました。戦争が続くと、兵力不足を補うため、昭和18年（1943）には学生も入隊することになり、各地で学生を送り出す壮行会が行われました（学徒出陣）。当時、日本の植民地だった朝鮮・台湾の人も徴兵されました。昭和20年（1945）に日本が戦争に負けると、軍隊は解体され、徴兵制度は廃止されました。戦争中は兵士だけでなく、工場などで働く人も政府が強制的に集めるようになりました。これを徴用といいますが、昭和13年（1938）の国家総動員法と翌14年の国民徴用令で、国家が管理・指定する工場や軍関係の工場に多くの技術者が徴用されました。昭和16年（1941）からは女性もふくめた徴用が行われ、その後も学徒勤労働員や女子挺身隊などにより、労働力不足を補おうとしました。



04

配給制度

戦争や災害がおきたときに、かぎりある物資の配分や購入方法などを政府が決めることを配給といいます。日中戦争が始まると、軍隊で使う物資から配給制が始まりました。昭和15年（1940）からは米・みそ・しょう油など人々の生活に欠かせない10品目が次々と配給制となりました。配給制では家族構成や年齢などによって購入できる数量が決まります。しかし、戦争が長引くと物資そのものが不足し、十分な量が手に入らなくなりました。配給制度は戦後も物資不足が落ち着くまで続きました。

06

教育勅語

明治23年（1890）、近代日本の教育方針として、明治天皇の名のもとに国民へ発せられたことばです。そこには、天皇をうやまい、国を愛することなどが示されており、神聖なものとして扱われました。全国の学校に「教育勅語」の複製品が配られ、学校内に建てられた「奉安殿」にしまわれました。登下校時などには、教師や生徒も奉安殿に向かって最も敬礼をしなくてはなりませんでした。

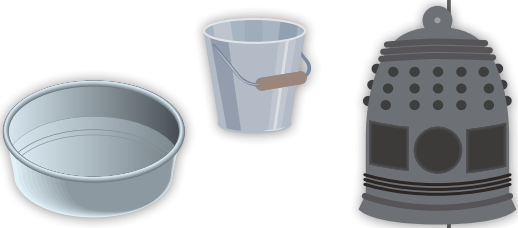


奉安殿
昭和14年（1939）荒川尋常小学校『卒業記念写真帖』より

05

供出

戦争のため、不足する物資を国民から提供させました。農家からは米をはじめとする農産物や軍馬とするための馬を提供させました。武器をつくるためには大量の鉄・銅などの金属が必要だったため、昭和16年（1941）に金属回収令が出されると、鉄製の門や金属製のボタンまで集められました。滝野川国民学校の記録では、ゴミ箱・ストーブ・石炭バケツ・洗面器・火鉢のほか、水道の栓も回収の対象になっていました。お寺のつり鐘も回収の対象となりましたが、浮間観音寺の鐘は、戦後、奇跡的に寺に戻されることができました。供出した金属製品の代わりに、さまざまな代用品がつけられました。



07

国民学校

昭和16年（1941）4月、「尋常小学校」は「国民学校」という名称に変わりました。それにより教科書や授業の内容も戦争の影響を強く受けたものになります。国民学校では、天皇と国家のために命をささげるように教育され、歩き方や姿勢などの日常の細かい身のこなしまで規則にしばられました。当時の子どもたちは、小さくても天皇に仕える国民という意味をこめて「少国民」とよばれました。